

【シンポジウム「平等って何だ？」】

イントロダクション

中 金 聡

疾風怒濤の新自由主義の時代は終焉を迎えたといつてよい。経済活動の自由が無制限に容認され、富の社会的分配が規制のない市場メカニズムにゆだねられた結果は、未曾有の貧富格差であった。企業倒産数と完全失業率は戦後最悪の数値を記録し、参政権はあっても職はなく、住むところすら失った人びと、「二級市民」が大量に生みだされたことはいまだ記憶に新しい。

そこであらためて浮上してきたのが「平等」(equality)とは何かの問題である。もちろん自由主義も平等や公正さの観念を知らないわけではなかった。もし自由が万人に保障されるべきであるとするなら、少なくとも自由を行使するチャンスがすべてのひとに平等に開かれていなければならないはずだからである。この「公正な機会均等」原則すら十分に確立されないまま、すべてのひととを過酷な自由競争のなかに投げ込んだ新自由主義は、荒野のロジックと称されるにふさわしい。だが「チャンスの平等さえ確保されれば」と考えることも、すでに楽観的といわざるをえない状況にある。自由主義を奉じる先進産業諸国がいま直面しているのは、自由への平等な権利を制度的に完備した社会のなかで多くの人びとが将来への展望をもてなくなり、またそれがモラル・ハザードをもたらしているという事態なのである。

政治理論の領域では、「機会の平等」に「結果の平等」の要素を加えることによって、自由主義をより実質的に公正なものにする平等主義的リベラリズムの試みがさまざまに展開されてきた。その嚆矢となったのは、アメリカの政治哲学者ジョン・ロールズが『正義の理論』(*A Theory of Justice*, 1971)で提唱した「公正としての正義」の観念である。人びとのあいだに生来の力の差がある

イントロダクション (中金)

ことは事実だからしかたがない。だが、この自然がさだめた事物の偶然的な配置から神聖不可侵の所有権を導く思想は、「正義」の名において拒絶しなければならない。市場原理にもとづいて不均等に分配された富は、それが「もっとも恵まれない人びとの最大の利益になるように」再分配されるという「格差原理」のもとでのみ道徳的に許容される。一方、ロールズの正義を行きすぎた平等としてしりぞけるリバータリアニズム（絶対自由主義）陣営も存在する。自由だけでなく、自由の果実も正当にそのひと自身に帰すべきだと主張するかれらにとって、道徳的に許容しうるのは「機会の平等」までとなる。何をもって十分な平等とみなすかにはいまだ合意がないという意味で、平等は「本質的に論争的な概念」(essentially contested concepts)のひとつでありつづけているとあってよい。

自由も平等も道徳的価値であることにはかわりはない。しかし自由主義社会においては、自由こそが人間存在の本質に根ざした所与であり、平等はそこから生じるさまざまなコストを是正するという課題、達成されるべき目標とみなされる。ここに平等がすぐれて政治的な問題となるゆえんがある。ではわれわれは「平等」ということばでいま・何を考えるべきなのだろうか。

政治研究所はシンポジウム「平等って何だ？」(2010年7月7日)を開催し、3人の報告者にそれぞれの専門の観点から問題提起をしていただいた。3報告から明らかになったのは、平等の享受を阻んでいるのも、それを実現する責務をになうのもわれわれ自身であること、そして理念としての平等を実行可能なものにするには、社会的合意にもとづくルールが必要だということである。平等の問題に関心を寄せるすべての人びとの思索の一助となることを期して、以下に当日の報告ペーパーを再掲する。

《参考文献》

R・ドゥオーキン、小林公ほか訳『平等とは何か』(木鐸社、2002年)

S・ムルホール／A・スウィフト、谷澤正嗣・飯島昇蔵訳者代表『リベラル・コミュニタリアン論争』(勁草書房、2007年)

R・A・ダール，飯田文雄ほか訳『政治的平等とは何か』（法政大学出版局，2009年）

J・ロールズ，川本隆史ほか訳『正義論・改訂版』（紀伊國屋書店，2010年）